

市民生活に「音楽」が溶け込むまちを世界に発信することによる 観光誘致の実現可能性（概要）

研究責任者 名古屋大学 大学院経済学研究科

教授 柳原光芳

1. 大府市について

愛知県は大きく2つに分けられ、西部が尾張地方、東部が三河地方と呼ばれる。大府市は尾張地方の最も東に位置する地方自治体の1つであり、尾張地方に属する豊明市、東浦町、東海市および名古屋市（緑区）と、また、三河地方に属する刈谷市に接している、総面積が33.66平方キロメートルの市である。人口は令和5年12月末現在において92,892人で過去最高を記録し、これまでほぼ一貫して人口の増加が見られる（大府市，2024）。令和3年10月1日現在の人口密度は1km²あたり2,763人で、隣接する豊明市の2,970人、東海市の2,609人および刈谷市の3,045人や、少し離れた東郷町の2,422人や半田市の2,471人と比較しても大差が無い大きさであることがわかる（愛知県，2024）。

大府市の産業別就業人口は、令和2年度の国勢調査では、第1次産業、第2次産業、そして第3次産業が順に729人、19,931人そして29,598人となっており、総数50,258人に占める割合はそれぞれ1.5%、39.7%、そして58.9%となっている。このうち特に、第2次産業の中の製造業については17,085人で、総数に占める割合は34%となっている（愛知県，2022）。これについても、豊明市の32%、東海市の30%および刈谷市の42%や、東郷町の29%や半田市

の31%と比べると、刈谷市がやや大きくはなっているものの、隣接する、あるいは少し離れた市町とは大きな差は見られない（愛知県，2022）。

大府市の観光資源については、愛知県（2023）の「観光レクリエーション利用者統計利用者数上位観光資源」を見ることで、上と同様に隣接する市町との比較がある程度可能となる。これによると、2022年度における利用者数が上位50位の愛知県内の観光資源が紹介されている。まず、第1位から第3位までの観光資源は、刈谷ハイウェイオアシス（刈谷市）、中部国際空港来場者（常滑市）およびNEOPASA岡崎（岡崎市）となっており、それぞれ約715万人、約702万人および約538万人となっている。これらの3つの観光資源は愛知県において500万人を超えるものとなっているが、これらはいずれも高速道路のサービスエリアおよび空港施設となっており、いわゆる観光地という範疇に入るものと捉えることは難しい。そこで、これら以外のものについて見ると、第4位の豊川稲荷（豊川市・約493万人）、第5位の熱田神宮（名古屋市・約472万人）が400万人台の利用者数となっているものの、第6位から第8位のは2,300万人台、第9位から第28位までは100万人台となっており、それ以下のものについては100万人に満たないものとな

っている。第 50 位のものの利用者数は約 45 万人となっている。

大府市の観光地は、これら上位 50 位の中には含まれていない。大府市の観光資源への来場者数で最も多いものとしては、10 月にイベントとして開催された大府市産業文化まつりの約 10 万人が挙げられている。また、同様に大府市の隣接する市町については、豊明市での豊明秋まつりで約 2 万人、東海市での東海秋まつりで約 15 万人、また少し離れた東郷町の名古屋ゴルフ倶楽部和合コース約 3 万人となっており、大府市と同じく集客力の大きい観光資源は特には認められないと言える¹。一方、刈谷市には約 133 万人を集客する刈谷市交通児童遊園に代表される観光資源がいくつかあり、刈谷市全体で約 200 万人の来場者数を集めている²。また半田市においても、約 31 万人を集客する半田赤レンガ建物に代表される観光資源がいくつかあり、半田市全体で約 98 万人を集めている。

最後に、大府市の施策に見られる特徴としては、主なものとして 2 つ挙げられる。1 つは健康都市である。これは大府市の昭和 45 年の市制施行の 4 年後に策定された第 1 次大府市総合計画から、現在の第 6 次計画まで、都市目標として健康都市の言葉が含まれている。また、愛知県によるあいち健康の森構想に基づき、大府市と東浦町にまたがる形で、県の施設であるあいち健康の森公園、あいち健康プラザなどや、国の施設である国立長寿医療研究センターな

どが整備されたこともあいまって、大府市が健康都市としてまちづくりを推進している。現在では、東浦町とともにこれらの地区をウェルネスバレーと名付け、新産業育成も掲げて新たな形で取り組んでいる。

もう 1 つは、「バイオリンの里」づくりである。これは明治 20 年に創業した、国内で最初のバイオリン製造会社である鈴木バイオリン製造株式会社を、令和 3 年に本社工房を名古屋市から大府市に移転したことを契機として、大府市がバイオリンに関するさまざまな活動を核として、まちづくりに取り組もうとする試みである。この鈴木バイオリン製造株式会社移転の実現については、決して偶然のものではなく、歴史の中の必然ともいえるものであった。特にその源流は、昭和 10 年に大府に鈴木バイオリンの分工場ができたこと、また、その近くにバイオリンの音の研究や新しい楽器の開発を行う済韻研究所が作られたことなどに求められる（大府市、2023）。その後、大府市からは国際的な活躍を長年にわたり続けている竹澤恭子氏や、クラシックだけでなくポップスなどの演奏にも取り組む水野紗希氏など、多くのバイオリニストや他の楽器の演奏家を輩出している。このように、大府市はものづくりの面でも、またひとづくりの面でも、バイオリンの里づくりを実現できるための素地があり、次節で紹介するように、現在もそれは継続、そして発展しているところである。

以上のように、大府市は人口密度、産業従事者などから、周辺の市町村とは大きな差は見られない。また、観光資源についても、刈谷市、半田市はやや大府市より集客力のあるものが認められるものの、県内に

¹ 豊明市には中京競馬場があり、その集客者数は約 51 万人であるが、ここでの観光地とは少し性質が異なるため除外した。

² 刈谷ハイウェイオアシスを除く。

においては決して顕著に多いものではなく、また他の隣接する市町の集客力は大府市とほとんど変わらない。すなわち、これらのデータからは大府市は、いわば「標準的」な市といえる。その一方で、大府市の歴史に根ざしたバイオリンの里づくりの試みは、他の市町には見られない特筆するに値するものといえる。また、その試みは本格的に始動をしてまだ数年ではあるものの、徐々に市民の中にも浸透をしていっている。

そこで、本研究は、このようなバイオリンでまちづくりに取り組むことで市民の生活の豊かさの向上をめざす愛知県大府市の試みを、どのような形で世界に広く発信すれば、大府市、ひいては愛知県へと観光客を呼び込めるか、その具体的な方策を経済理論に立脚しつつ考えることを目的とする。それにより、他の自治体でのまちづくりのありかたに示唆を与えるだけでなく、自治体の魅力の発信のありかたのヒントにもなり、それによる観光需要の新たな創出の可能性を示すことを試みる。

本研究は以下の4つからなる。第1に、理論的側面からのアプローチを、複占市場モデルの拡張によって行う(2節)。ここではYanagihara (2024)のモデルに基づき、数値例を示すことで直観的な理解が可能となる形で説明を行う。第2に、大府市のバイオリンの里づくりが観光需要を誘引するものとし、それがどの程度大府市経済と愛知県の経済に影響を与えるか、産業連関分析を行うことで具体的に示す(3節)。第3に、大府市のバイオリンの里づくりの一環である、あいち健康の森公園で行われた「バイオリン/フィドル音楽の休日 2023」で行った、参加者へのアンケート結果から、大

府市民のバイオリンの里づくりに対する評価や、またそのようなイベントを、大府市民だけでなく他の自治体からの来訪者がどのように捉えているかを見ることで、このイベントの将来の観光化にとり重要な点について明らかにする(4節)。最後に、大府市の試みをいかにして世界に発信すべきかについて考え、大府市の試みそのものが観光の対象となり得るかについて考察する(5節)。

2. 街の魅力の向上と観光活性化に関する複占市場モデルによる分析

本節では、需要者数が限られているところで、2つの地域がその需要者を自分の地域に観光客として誘致をするためにどのような水準の生産量となり、また価格を提示し、地域の便益、需要者の便益およびそれらの和である社会厚生がどのような水準で決定されるかについて、既存の複占モデルを拡張することで理論分析を行う。そのような状況の下、2つの地域が街の魅力を高めた場合に、どのような影響が生じるかについて見ていく。また、理解が直観的にできるように、数値例で示す。

大府市の「バイオリンの里」づくりの取り組みは、それ自体としては市民のしあわせの程度、すなわち経済学でいうところのいわゆる社会厚生の上昇をめざしたものである。それと同時に、街の魅力が高まることは、その地域への観光客を引き寄せる効果があると考えられるため、直観的にはその地域へ訪れる観光客の満足度を高めるとともに、観光客数の増加をもたらす、それによりさらにその地域の便益も高まると考

えられる。しかし、このような帰結が生まれるのは、市場の規模に制約がなく、需要者が多数存在するときに限られる。また、このような帰結は必ずしも完全競争市場の下に限定されるわけではなく、市場の規模の制約がない限りは、不完全競争の場合でも生まれる。この事実は、観光客が必ず訪れたいと思うような場所で、その地域が観光市場を独占しているような場合や、またそのような場所が2つ存在する下で、それらの地域が観光市場を複占競争下に置くような場合には、それぞれの地域で街の魅力を高めることが、より多くの観光客を集め、また観光客の満足度を高める一方、それぞれの地域の観光から得られる便益も高めることになることを意味している。例えば、飛騨高山がその限られた地域において観光需要を独占しているような場合は、あるいは京都と奈良、または大阪と、限られた地域において観光需要を奪い合う、複占・寡占的な状況である場合がそれにあてはまる。

しかし、街に十分な魅力が無い場合には、上のような帰結が生まれるかどうかは明らかではない。日本政府観光局（2023）のデータによると、訪日旅行者の都道府県別訪問率ランキングを見ると、東京都が52.9%、大阪府が39.6%、千葉県が37.5%、そして京都府が29.8%と、これら上位の4都府県が突出をしている一方、大府市が位置する愛知県は順位としては11位ではあるものの、訪問率は5.8%に留まり、上位の4都府県からかなり離されている。そのため、まず前提として考えるべきことは、愛知県への観光客数はかなり限られたものであるということである。愛知県（2024）の訪日外国客動向調査・調査結果報告書によると、

愛知県の有する国際空港である中部国際空港での訪日外国人客を対象とした調査では、愛知県内で訪れた場所の上位3か所は名古屋城（51.4%）、名古屋駅周辺（50.3%）、栄・大須周辺（37.9%）が圧倒的で、4位は（場所にかかわらず）温泉の17.6%となっている。それ以外の場所については、ほとんど一桁、あるいは1%未満となっている。これらに対して、同じ調査で愛知県以外で訪れた場所については、岐阜県（白川郷・高山）が34.1%、東京都（浅草・東京スカイツリー）が18.6%、大阪府（USJ・海遊館）が17.5%と、遠隔地であるにもかかわらず非常に高い値となっている。つまり、中部国際空港を利用する訪日外国人客は、名古屋市には「立ち寄り」程度で、多くは愛知県外の他地域に訪れており、愛知県内の観光地にはほとんど足を運んでいないといえる。

このような状況においては、愛知県内の市町村は、より多くの観光客、とりわけ海外からの訪日外国人客の集客を増やすべく、街の魅力を高めていく必要があるといえる。ただし、気をつけるべきは、愛知県に訪れる観光客が限られている中でそれが行われるという点である。すなわち、それぞれの愛知県内の市町がどのような方法・手段で観光客を集めるべきかについて、誤った方法・手段で行ってしまうと、観光客の奪い合いだけが激しくなり、市町の便益がほとんど高まらない、あるいは時には疲弊して低くなってしまう可能性もある。

そこで本章では、このような観光客数が一定とした下で、2つの地域が観光客を獲得する競争を行った場合に、経済にどのような影響が生まれるかについて、

Yanagihara (2024)で構築されたモデルに基づき、簡単な数値例を使って示す。それにより、愛知県内の、観光資源に十分に恵まれていない市町がどのような形で観光客の獲得競争を行えばよいかについて、理論

	ケース1	ケース2	ケース3
a	10	20	10
b	1	1	0.8
c	1		
X	5		
独占	4.5	9.5	5.6
	5.5	10.5	5.5
	20.3	90.3	25.3
	12.4	45.1	12.7
	32.6	135.4	38.0
複占	6.0	12.7	7.5
	4.0	7.3	4.0
	18.0	80.2	22.5
	18.0	80.2	22.5
	36.0	160.4	45.0
需要者が 限定下の 複占	5.0	5.0	5.0
	3.5	3.5	3.0
	12.5	12.5	10.0
	16.3	41.3	17.5
	28.8	53.5	27.5

図表 2.1 数値例

(注) a,b,c および X はそれぞれ全員の選好、個人の選好の弱まり方、限界費用、および需要の規模を表す。また、独占、複占、および需要者が限定下の複占の各行の中には、生産量、価格、地域住民の純便益、観光客の純便益、および総便益が上から順に書かれている。最後に、ケース 1 は数値例の基準となるケース、ケース 2 は観光客の全体が一律に観光への選好を強くしたケース、そしてケース 3 は観光客の中で観光への選好が強い個人ほど選好が強まったケースをそれぞれ意味する。

的な観点から見ていき、今後の街の魅力を高める方向性、あるいは観光客誘致のあり方について示す。その分析の結果をまとめたものが、図表 2.1 である。

この図表から得られた主な結論としては、以下の通りである。まず、いずれのケースにおいても、生産量は複占市場の下の方が一番多くなっている。これは独占よりも複占の方が地域間の競争が強まることで、相互に需要を奪い合おうとするため、価格を下げるためである。実際、価格を見ると複占の方が独占よりもより低くなっていることがわかる。そのため、独占の場合には地域住民の総便益が高まるものの、観光客の純便益は低いものとなり、結果として総便益は低くなる。また、需要者が限定されているところでは、供給が限られてしまうため、その下での複占のケースよりも、通常の複占のケースの方が生産量、そして全ての純便益が大きなものとなっている。

次に、横方向に比較する。特に見るべき所は、需要者が限定下の複占のケースである。ケース 1 とケース 2 を比較した場合、生産量、価格および地域住民の純便益は変化しないものの、観光客の純便益と、それにしただって総便益が増加していることがわかる。生産量に変化をしないのは、需要者が限定されていることによるので当然の結果と言える。このときには、全ての需要者すなわち観光客が、観光に対して選好を同じ水準だけ高めるため、その分だけ観光客の純便益が高まっていることがわかる。

それに対して、ケース 1 とケース 3 を比較すると、ケース 3 では価格、地域住民の純便益そして総便益が低下する一方、観光客の純便益はむしろ増加していることがわ

かる。地域住民の純便益が低下をするのは、観光客の観光への選好の高まりに対して、より多くの観光客を獲得すべく価格競争を行うためである。それに対して、観光客の純便益は、観光への選好の高まりとともに価格の低下の効果も加わり、増加することとなる。しかし、それらをあわせた総便益は低下してしまっている。

この最後の結果は、地方自治体の観光政策にとり、重要な示唆を含んだものである。ケース3のように、これまで観光に関心が強くない需要者が関心をより強く持つようになると、限定された需要の下ではより地方自治体間の競争が強まってしまい、地域住民の純便益が損なわれてしまう。これは例えば、現在の日本におけるオーバーツーリズムの状況を表しているともいえる。また別の解釈をすれば、もし地方自治体が観光政策として、観光に関心が強くない需要者に照準を合わせたような需要刺激策をとったとすると、それはむしろ地域間競争を促すだけで、いずれの地方自治体にも純便益をもたらさないということになる。逆に言えば、地方自治体が観光政策をとる際には、その照準を観光客全体にあて、全ての観光客の満足をたかめるようなものでなければならないことを意味している。

3. 愛知県大府市のまちづくりイベントの施設整備が大府市・愛知県の生産に与える影響

本節では、近年開始された大府市のまちづくりのイベントの1つである、音楽に関するイベントが、今後も市民生活の中で定着し継続的なものとさせるために、その施

設整備を行なった際、それがもたらす大府市および愛知県の生産への影響について、二地域間産業連関分析を行うことで数量的に明らかにする。

先に触れたように、大府市は「バイオリンの里」づくりを精力的に推し進めることで、市民の生活の中にバイオリン、そして音楽を溶け込ませ、市民生活をより豊かなものとしようとしている。そのための手段の1つとして、次節でより詳細に紹介する「バイオリン/フィドル音楽の休日」という、幅広いジャンルの音楽が、あいち健康の森公園内の複数の場所で奏でられる野外イベントの開催がある。これは市民だけでなく市外の演奏者が演奏をし、それを市民が楽しむということをめざしながらも、市外からの来訪者をより多く集めることで大府市のプレゼンスを高めるということもめざしている。また、もう1つの手段として、「野外クラシック音楽祭」という、大府市出身のプロのバイオリニストであり、かつ大府市の広報大使も務めている水野紗希氏や、おなじく大府市の広報大使を務めているプロのギタリストの山下俊輔氏が中心となり、大府みどり公園で行われるものである。これは「バイオリン/フィドル音楽の休日」とは異なり、会場はメイン会場1つのみであるが、その会場は野外ステージを設けて開催される、本格的なコンサートである。それを聞く人たちは椅子も用意されているものの、公園の広場で、公園内に来ているキッチンカーで買ったものを食べたりしながらリラックスをして聞くこともできる。

これらのいずれのイベントも、これまでのところ、イベントのたびにコンサート用ステージを設営する形で開催されている。

これはイベントが定期的とはいえ、いわば単発的な形で開催されてきていることによるものと考えられる。ただし、イベントがこれまでよりも多く開催されるようにするためには、野外ステージを設備として整える必要があるだろう。また、現在は「バイオリンの里」づくりを公による形で推進してきているものの、その効果が今後現れ、市民の中に真の意味で「バイオリンの里」としての市民文化が定着し、民による形で音楽に関する諸活動が継続的になされていくためには、野外ステージの整備の重要性はより大きいものと考えられる。

そこで、本節では、大府市の公園に野外ステージを整備し、土日に定常的に音楽やその他イベントで人が集うことでもたらされる1年間の経済効果について定量的に評価する。特に、このような形で大府市で生じる需要の増加が、大府市だけに留まらず愛知県全体にも波及することを考慮し、ここでは大府市と愛知県の二地域からなる産業連関表を考えた上で、それぞれの市・県にもたらされる経済効果を算出する。

モデルは図表 3.1 のような、大府市と愛知県の二地域間産業連関表に基づくものである。これは愛知県ウェブサイト内にある

「2015（平成 27）年愛知県産業連関表」のページで提供されている、「観光用経済波及効果分析ツール（109 部門）」のエクセルファイルを応用する形で作成している。このファイルでは、愛知県と国内の他都道府県の2地域からなる産業連関表が作成されている。また、このファイルは、「平成 27 年（2015 年）産業連関表、平成 27 年（2015 年）愛知県産業連関表、これら2つの表から作成する愛知県内外2地域間産業連関表を使い、愛知県内及び県外に新規需要が発生した場合に、愛知県内外の各産業の生産などに、どの程度の効果を及ぼすかを分析するツール」であるとされている。このファイルでは、需要の変化を入力することで、生産の増加が自動的に計算することができる。そこで、このファイルにおける愛知県と他都道府県のデータを、大府市と愛知県のデータに置き換えたものを利用し、産業連関分析を行うこととする。

この二地域間産業連関表を用いて、大府市で野外ステージを整備することで需要が発生し、それによって生まれる経済効果について、数量的に分析を行う。具体的な需要が増加する想定は、以下の通りとする。まず、①野外ステージの建設を行うこと、

		中間需要（大府市）				中間需要（愛知県）				最終需要（大府市）			最終需要（愛知県）			愛知県の 移出	愛知県の 移輸入	生産額
		耕種農業	畜産	...	事務用品	耕種農業	畜産	...	事務用品	家計外消費 支出(列)	...	在庫純増	家計外消費 支出(列)	...	在庫純増			
（大府市）	耕種農業	X_{OO}				X_{OA}				F_{OO}			F_{OA}			E_O	$-M_O$	X_O
	畜産																	
	...																	
	事務用品																	
（愛知県）	耕種農業	X_{AO}				X_{AA}				F_{AO}			F_{AA}			E_A	$-M_A$	X_A
	畜産																	
	...																	
	事務用品																	
粗付加価値	家計外消費 支出(行)	V_O				V_A												
	...																	
	間接税																	
	(控除) 補助金																	
	生産額																	
		X_O				X_A												

図表 3.1 大府市と愛知県の二地域間産業連関表（概念図）

②そこをイベントとして利用するのは、おおよそ土曜日あるいは日曜日とすること、③そのイベントには訪問者がいること、④そのステージが利用される際には、水道光熱費と、利用による修繕費などが必要となること、⑤イベントが行われる際には、広告宣伝がなされること、そして⑥その施設を運営するに当たり、運営費が必要とされることとする。また、分析結果を理解しやすくするため、野外ステージの建設による直接的な需要は1年間で発生するものとし、後年における経済効果についてはここでは考えないこととする。

上のような想定にしたがって、具体的な需要の増加額について考えていく。まず、施設の整備費については、以下の3つの試算に基づいている。1つめは、日進市（2015）にある、日進市役所の近くに建設を予定していたイベントひろばの試算である。ここでは、ひろばの整備について3つの案が提示されており、そのうち野外ステージの施設の整備費が中間のものの金額を利用する。具体的には、約3,100万円である。2つめは広島市（2015）にある、市民球場の跡地に整備を予定していた、屋根付きの野外ステージの整備費である。これは日進市のものと比べてやや大きいため、その概算の事業費が1億8,000万円と試算されている。この金額を利用する。3つめは花巻市（2019）にある、「イーハトーブの四季を彩る「宮沢賢治童話村野外ステージ」整備事業」にかかる事業費である。これは、既存の野外ステージを拡張し、大規模イベントにも対応できるようにするために整備をするものであり、その金額は約5,400万円とされている。これら3つの金額の平均

をとり、施設整備費を約8,800万円とした。

次に、イベントによる施設の利用を、土曜日・日曜日とすることで、1年間の利用日数は $365 \div 7$ より約52日と求められる。また、熊本県「熊本県野外劇場 指定管理者 令和3年度（2021年度）管理運営評価票」では、野外ステージの実際の利用日数として、45日と書かれている。そこで、おおよそ真ん中に当たる50日を1年あたりの利用日数として妥当なものと考え、採用する。また、そこには1日あたり240名の訪問者があるものとする。これは、次章で紹介する、アンケート調査を行ったイベントの「バイオリン/フィドル音楽の休日」において集められたアンケートの回答数が2日間で約400であったことから、その約半数を想定したものである。したがって、1年あたり、 $50（日） \times 240（名） = 12,000$ 名として訪問者数が求められる。これらの訪問者が大府市に訪れることで、一人あたり食費として1,500円、また会場までのバス移動で200円の支出があるものとする。以上より、イベントの訪問者による需要の増加額合計は、 $12,000（名） \times （1,500 + 200）（円） = 約2,040$ 万円とした。

最後に、ステージの利用、イベントの開催に際してかかる費用については、上と同様、熊本県「熊本県野外劇場 指定管理者 令和3年度（2021年度）管理運営評価票」を参考にした。具体的にはそこに書かれている費用をほぼそのまま援用し、水道光熱費や修繕費などの施設管理費が約920万円、広告宣伝費やイベント開催のための補助費などの事業費が約300万円、そして電話代や事務費などの運営費が約100万円であるものとする。したがって、これらの金額の

合計は約 1 億 2,160 万円となる。

以上より、ここで想定される総需要の増加額は、約 8,800 万円＋約 2,040 万円＋約 1,320 万円＝約 1 億 2,200 万円とする。これを産業連関表における最終需要の各項目に割り振ることで、生産の増加について求めることができる。その結果をまとめたものが、図表 3.2 である。結果としては、総合効果として書かれているように、当初の 1 億 2,220 万円の需要の増加は、愛知県を含めた全体として 2 億 4,717 万円の生産の増加をもたらし、その大きさは約 2.02 倍であることがわかる。また、大府市内だけで捉えたとしても、大府市内の生産の増加が 1 億 8,654 万円であることから、その大きさは約 1.53 倍となっている。

「バイオリンの里」づくりは、大府市民の生活の、特に文化的な豊かさを向上させるだけでなく、このような形で経済的にも大きな効果をもたらすことが理解できる。特に、その効果は大府市だけに留まらず、愛知県全体にも広がっていることが見て取れる。

単位：100万円

需要額			
消費・投資	122.20		
大府市内生産分		122.20	
愛知県内生産分			0
大府市分 愛知県分			
直接効果	122.20	122.20	0
第1次間接効果	79.99	39.39	40.60
直接効果＋第1次間接効果	202.19	161.59	40.60
雇用者所得への効果	29.93	24.35	5.58
第2次間接効果	44.98	24.95	20.04
総合効果	247.17	186.54	60.63
粗付加価値誘発効果			
直接効果	56.79	56.79	0.00
第1次間接効果	39.83	18.32	21.52
第2次間接効果	23.83	11.88	11.95
総合効果	120.45	86.98	33.47

図表 3.2 経済波及効果

4. 「バイオリン/フィドル音楽の休日 2023」におけるアンケート調査

本節では、前節で分析を行った対象である、大府市のまちづくりのイベントの1つとして、2023 年 11 月 4 日と 5 日の 2 日間にわたり開催された「バイオリン/フィドル音楽の休日 2023」において、名古屋大学経済学部柳原ゼミが大府市の協力の下行った、「『音楽の休日』(11/4・5)と大府市に関するアンケート調査」の結果をまとめる。

大府市では、現在「バイオリンの里」づくりの中に含まれる、まちづくりに関する施策・イベントは非常に多く、かつ、さまざまな形で行われている。大府市のバイオリンの里ウェブサイトには、図表 4.1 にあるように、それらの施策・イベントが、「大府とバイオリンの歴史」、「バイオリンを学ぶ」、「バイオリンを楽しむ」と「バイオリンのふるさと納税」の大きく 4 つの種類に分類されている。この分類は大府市の「バイオリンの里」づくりの時間軸そのものを示している。

「バイオリンを楽しむ」というのは、バイオリンに「今」さまざまな形で触れるというものであり、「現在」を志向するものが多く見られる。ここには本章で扱われる「バイオリン/フィドル音楽の休日 2024」も含まれる。本イベントが「今」の市民、また市外からの訪問者に楽しみを与えるということから理解できよう。

「バイオリンを学ぶ」には、バイオリンを通して「未来」の大府市をどのようにに形作するのか、またこれから大人になっていく子供たちをどのように育てていくかという思いが込められている。特に、「小中学校で

の取り組み」は他の市町村ではほとんど見られない施策が実施されている。小学校では、市内の9つの小学校全てで、4年生の音楽の授業の中で2時間分、バイオリンの授業が充てられている³。また、小学校には水野紗希氏が、また中学校には竹澤恭子氏が定期的に訪れ、児童・生徒たちに生の、プロの演奏家のバイオリンの音色に触れる機会が設けられている。水野紗希氏、竹澤恭子氏ともに大府市の出身であることから、いま活躍をされている大府市のゆかりの演奏家が、次世代を担う大府市のこどもたちを育てる形で、未来志向型の取り組みがなされている。

このような「バイオリンの里」づくりの取り組みには、比較的近年開始されたものが多く見られる。そのため、市民の中からも「バイオリンの里」づくりがいわば唐突にはじまったと受け止められることもある。特に、さまざまなイベント、施策が多く行われるようになったのは、鈴木バイオリン製造株式会社が2021年に名古屋市から大府市に本社を移転した後のことである。しかし、そのような本社の移転には、大府と鈴木バイオリン製造株式会社との繋がり、

³ 小学校においてバイオリンの授業が行われているところは日本においてはかなり限られているが、少数の小学校では見られる。例えば、常葉大学教育学部附属橘小学校ウェブサイトによると、本小学校では児童はバイオリンかチェロを学び、また他の楽器も学んだ上で、オーケストラ学習が行われている。駿台甲府小学校では、5年生に1年間、バイオリンの授業が実施されている（駿台甲府小学校ウェブサイト）。また恵那市の中野方小学校ウェブサイトにあるように、この小学校でも5、6年生にバイオリンの授業が採り入れられている。この中野方小学校での取り組みを参考に、大府市のバイオリン授業が導入された。

またそのほかさまざまな人と人との繋がりの上での、自然の成り行き、歴史の必然の結果であるとも考えられる。それら「過去」について触れられているのが、「大府とバイオリンの歴史」である。

このように、歴史の流れの中で大府市が「バイオリンの里」づくりに取り組むようになり、その「現在」の取り組みの中で、最も多くの市内・市外からの来訪者が集まるのは、「バイオリン/フィドル音楽の休日」と考えられる（図表4.2）⁴。このイベントの第一の目的は、大府市をバイオリンを含めたいろいろな音楽のあふれるまちにするというものである⁵。特に、市民にバイオリンなどの生の演奏が気軽に楽しめる機会を市がつくることで、市民の中に音楽への愛着を生み、市民自らがさまざまなかたちで音楽を楽しむことができるようにするところに主眼が置かれているように感じられる。ただし、先にも触れたように、市民の中に大府市とバイオリンの「過去」に対する理解が浸透を十分にしていないため、このような「バイオリン/フィドル音楽の休日」

⁴ 「バイオリン/フィドル音楽の休日」の参加人数については、正式な形では明らかにされていない。

⁵ 「バイオリン/フィドルの音楽休日」ウェブサイトには、そのコンセプトが以下のように書かれている。(1) 演奏機会の提供：音楽家の皆さんにコロナ禍で激減してしまった演奏機会を提供するとともに、ジャンルの異なる音楽家間の交流を促進します。

(2) 音楽をもっと身近に：市民や来訪者の皆さんに、バイオリン/フィドルなど弦楽器が活躍する多様なジャンルの音楽に触れていただく機会を提供します。(3) “バイオリンの里”の実現へ：これらの取り組みを通して、賑わいと活力あふれるお洒落なまち、“バイオリンの里”の実現を目指します。

大府とバイオリンの歴史 ・バイオリンによるまちづくりの推進に関する協定締結式 ・鈴木バイオリンについて・鈴木政吉物語 ・大府バイオリン縁起 ・「大府バイオリン縁起」コーナー（歴史民俗資料館） ・タケカワユキヒデ氏所蔵バイオリン寄託記念「大府とバイオリン展」 ・アインシュタインが鈴木政吉に宛てた手紙のレプリカを公開	バイオリンを学ぶ ・おおぶジュニア弦楽団 ・バイオリンの里おおぶメタバース ・小中学校での取り組み ・バイオリン工場見学・バイオリン作り体験（大府市観光協会） ・バイオリン講座の講師募集 ・バイオリニストが作曲した市公式イメージ曲 ・バイオリニストも就任している大府市広報大使 ・「バイオリンの里おおぶ」にちなんでデザインされたボックスティッシュ ・バイオリンの特集ページが全国広報コンクールで「入選」
バイオリンを楽しむ ・『おおぶジュニア弦楽団』設立記念コンサート&体験会 ・バイオリン講座（大府児童老人福祉センター） ・バイオリン講座（石ヶ瀬児童老人福祉センター） ・バイオリンコンサート（寿大学吉田学級 一般公開） ・きょうわバイオリン夜市 ・バイオリン／フィドル音楽の休日 2024 ・バイオリン教室（前期） ・スマホ壁紙（バイオリンなど） ・ふれあいバスの車内でバイオリンの音色を流します【2024年3月1日から】	バイオリンのふるさと納税 ・鈴木バイオリン製造のふるさと納税

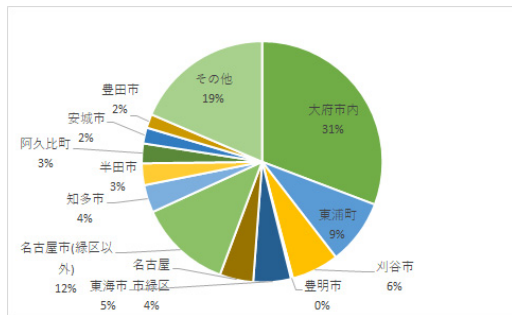
図表 4.1 バイオリンの里おおぶ（大府市ウェブサイト）

どで行った。その結果について、本節では概観し、市民がこの「バイオリン／フィドル音楽の休日」のイベントをどのように思っているか、大府市が取り組んでいるさまざまな「バイオリンの里」づくりについて知っているか、そして大府市の「バイオリンの里」づくりそのものをどう考えているかについて明らかにする。

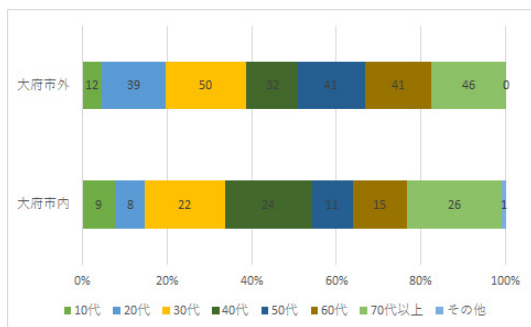
問1より、本イベントへの大府市民の参加者は最も多く、全体の約3分の1となっていることがわかる。参加者の多さの3位が東浦町の9%であり、これはあいち健康の森公園が大府市と東浦町にまたがっていることから理解できる。それ以下も隣接する市町が続いているものの、豊明市からの参加は見られない。ただし、大府市に続く2位は名古屋市（緑区以外）となってお

というイベントに対して、市民がどのように感じているのか、実際に調査をする必要がある。

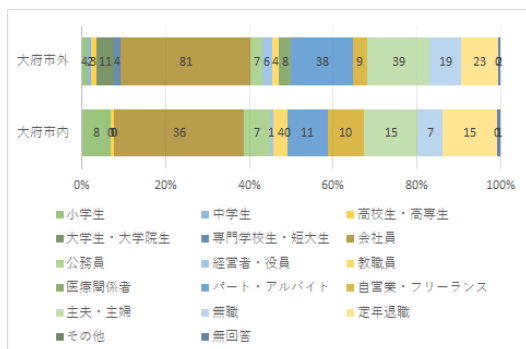
そこで、名古屋大学経済学部柳原ゼミ3年生と4年生の一部が、2023年11月4日と5日の2日間にわたり開催された「バイオリン／フィドル音楽の休日 2023」において、大府市の協力の下で、「『音楽の休日』（11/4・5）と大府市に関するアンケート調査」を、会場であるあいち健康の森公園な



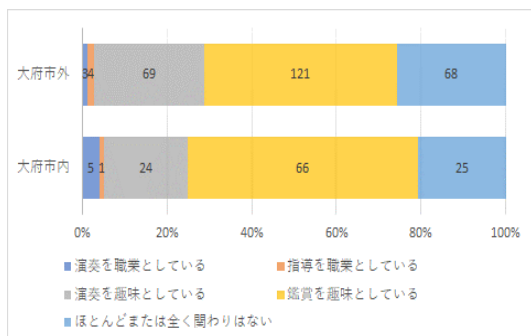
問1：訪問者の住所



問2：訪問者の年齢

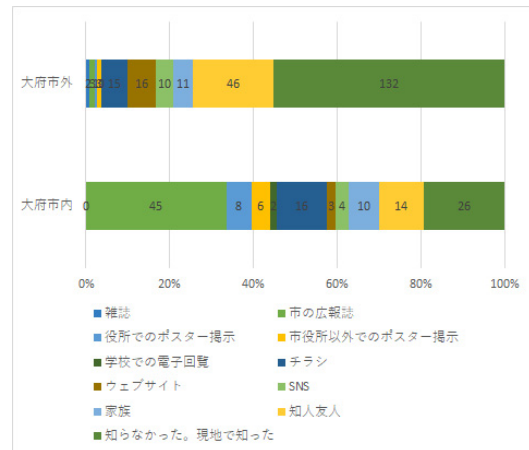


問3：訪問者の職業

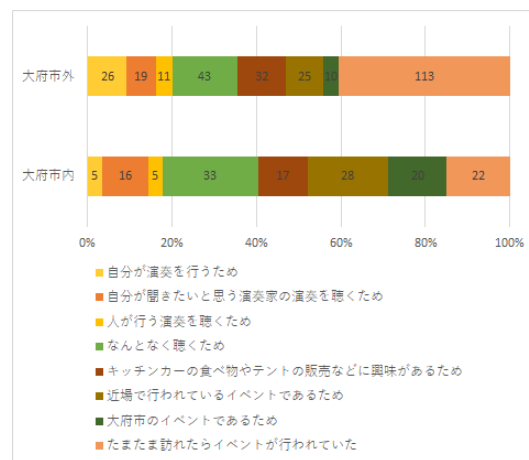


問4：訪問者の音楽との関わり

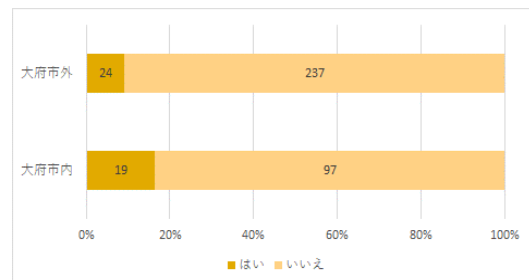
図表 4.2 「バイオリンの里」づくりの施策に関する質問



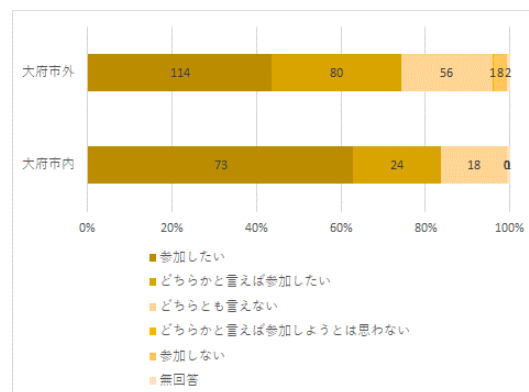
問5：イベントの情報の入手先



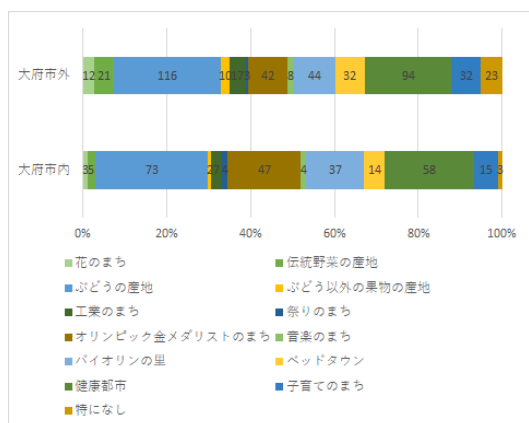
問6：参加の目的



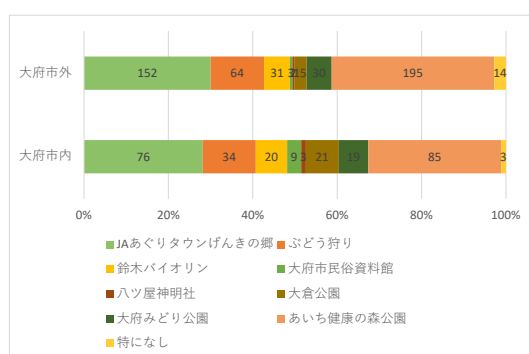
問7：昨年度の参加状況



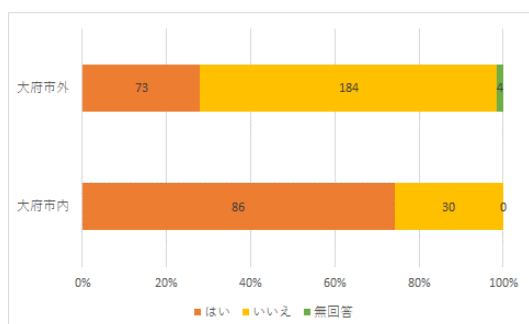
問8：来年度の参加希望



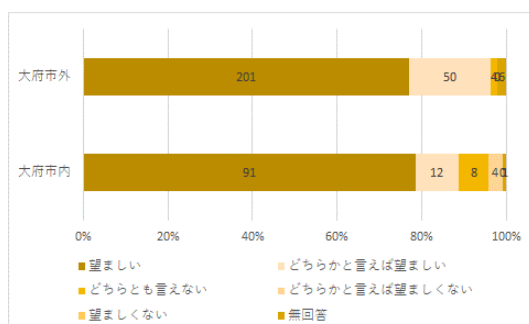
問 9：大府市のイメージ



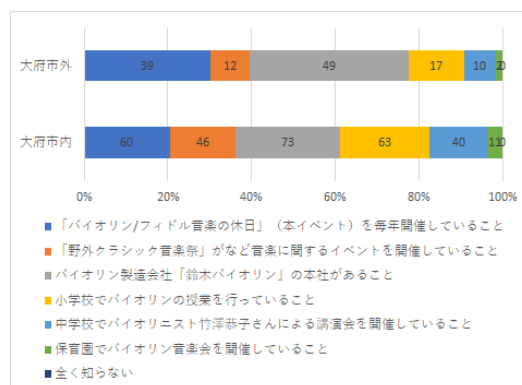
問 10：大府市内の観光スポット



問 11：大府市が「バイオリンの里」づくりに取り組んでいることを知っているか



問 12：大府市の「バイオリンの里」づくりの取り組みをどう思うか



問 13：「バイオリンの里」づくりの

具体的施策を知っているか

図表 4.2 「バイオリンの里」づくりの施策に関する質問 (つづき)

り、12%となっている。これは名古屋市が大府市に比較的近いこと、また、名古屋市の人口が他の市町村に比べて顕著に多いことがその理由として考えられる。

問 2 より、年齢については、大府市内と大府市外とで差が見られる。大府市外からの訪問者については、10 代を除いてほぼ偏りがなく、20 代から 70 代まで概ね同程度の参加者が見られる。それに対して大府市内からの訪問者については、30 代と 40 代、そして 70 代以上の訪問者の割合が高い。これは 30 代、40 代が子育て世代であり、休日に公園に家族で遊びに来ていること、また、70 代以上は近隣で行われている足の運びやすいイベントであるために気軽に来られたものと考えられる。なお、前者の子育て世代については、後の問 5 の自由記述の回答にも見られるように、市外・市内を問わず、バイオリンの音色に子供を直接触れさせたいという理由や、また会場で行われていた鈴木バイオリン製造株式会社によるバイオリンの体験に子供を参加させてあげたいなどの理由があげられており、バイ

オリンそのものに対する興味関心の強さも見られた。

問3より、職業については市内・市外ともに会社員が最も多く、ともに3分の1程度である。大府市内については、定年退職者がやや多く、問2で見た結果と整合的であることがわかる。ただ、小学生、中学生、高校生、大学生の参加がかなり少ない。これらの世代に参加を促すためには、問2で触れたように、子育て世代が幼児を連れてくることでバイオリン、音楽に触れる機会を与えて、音楽の楽しさを伝えることが重要であると思われる。

問4は、回答者の音楽への関わり方について、鑑賞を趣味としているという回答が市内・市外ともに約半数となっていることを示している。一方、注目すべきは演奏を趣味としているという回答が市内・市外ともに約2割となっている点である。これは本イベントが2日間開催され、また会場も多く設けられていたことから、演奏者が多く参加していたことにも強く関係していると思われる。ただし、演奏者の人数と比べても、この回答者数は多いものとなっているため、鑑賞のために訪問した、演奏を趣味としている人もかなりいたものと思われる。

問5は、今年度のイベントが行われることの情報の入手先について、大府市民は市の広報誌と回答したものが約3分の1、次が現地で知ったと回答したものが約2割、そしてチラシ、友人知人からと回答したものがそれぞれ約1割であった。大府市民の回答からは、紙媒体を通じたものが多くを占めていることがわかる。特に市の広報誌が有力な情報伝達手段となっていたことが

うかがえる。それに対して、ウェブサイトやSNSは、大府市民の情報源としてはそれほど活用されていないことがわかる。一方、大府市外からの訪問者については、約半数が現地で知ったという回答であった。これは先にも述べたように、JR東海の「さわやかウォーキング」イベントの参加者が多く含まれていたことによるものと考えられる。また、JAあぐりタウンげんきの郷は、近隣の市町の住民にとっては新鮮な地元の農産物が購入できることがよく知られていることから、そこに訪れた人たちが本イベントにたまたま遭遇したとも考えられる。それに加えて、知人友人からこのイベントを知ったという市外からの訪問者が約2割にも上っていることがわかる。これは市外からのイベントの参加者のうち、演奏者が知人を誘っていることや、また大府市民が知人を誘っていることなどが考えられる。これらに加えて、市外からの参加者にとっては、チラシ、ウェブサイト、SNSが重要な情報源となっていることがわかる。市外からの訪問者を増やすためには、やはりそのようなインターネット等を通じた、より広範な情報発信が必要となることがうかがえる。

問6は、本イベントにきた目的について問うている。これについては市内・市外で大きな差が見られる。まず、大府市民は、「気楽に」このイベントを楽しんでいる様子がうかがえる。回答で「なんとなく聴くため」、「なんとなく聴くため」、「キッチンカーの食べ物やテントの販売などに興味があるため」、「近場で行われているイベントであるため」や「大府市のイベントであるため」で約7割を占めている。これは大府

市が意図した、「音楽をもっと身近に」という3つの目的の1つにかなったものであるといえる。それに対し、市外からの訪問者の回答では、「自分が演奏を行うため」、「自分が聴きたいと思う演奏家の演奏を聴くため」および「知人が行う演奏を聴くため」という、演奏そのものに対する関心の高さが伺える。特に演奏者は26名にも上り、大府市民の5名を大きく上回っている。この結果は、本イベントの目的の1つ「バイオリンの里の実現」に関して、市外から多くの人が集まってくことで、「賑わいと活力あふれるお洒落なまち」としていくことが期待されることを意味しているといえる。

問7より、昨年のイベントの参加者は、やや大府市内からの訪問者の方が市外からの訪問者を上回っているが、それぞれ約15%、約10%である。若干ではあるものの、大府市民の中に本イベントが定着しつつあることを示唆している。これに対して問8からは、大府市民では「参加したい」と来年の参加を希望している回答が6割を超え、また「どちらかといえば参加したい」という回答を含めると8割を超えている。これは大府市外からの訪問者では、「参加したい」の回答が半数以下であることを考えれば、大府市民のイベントに対する関心の高さが見て取れる。本イベントが今後さらに市民の中に定着していくことが期待される。また、「どちらかといえば参加したい」の回答まで含めると、大府市外からの訪問者についても8割に迫る多さで、大府市外の人々へも本イベントが浸透しつつあることが想像される。

問9の、大府市に対するイメージについては、大府市民の回答と大府市外からの訪

問者の回答で類似している点と、また異なる点について、それぞれ見ていく。まず類似している点としては、回答の上位に「ぶどうの産地」と「健康都市」があげられている点である。「ぶどうの産地」が1位となっているのは、大府市の農畜産物の収穫量ウェブサイトにあるように、平成18～19年の大府市のぶどう収穫量が県内一位であり、それが県民に広く認識されているためであると考えられる。また、「健康都市」という回答は、大府市が昭和62年に「健康づくり都市」宣言を行ったこと、県の施設であるあいち健康プラザを中心とした、あいち健康の森公園が大府市の中にあることが広く知られていることによるものである。これらに対して、大府市民の回答の3位は「オリンピック金メダリストのまち」、4位は「バイオリンの里」となっており、市民の中には「オリンピック」のイメージの方が、「バイオリン」のイメージよりも強いことがうかがえる。これは市内にある至学館大学から、レスリング選手で多くの金メダリストを生んできた長い歴史があること、また、それが市役所でも大きく紹介されていることによるものと考えられる。大府市外からの訪問者の回答は、これらの順位が逆転している。これは「バイオリンの里」づくりに関するさまざまな情報が、近年特にマスコミを通じて発信されていることによるものと考えられる。この点を踏まえると、相対的には大府市民の中での「バイオリンの里」のイメージはまた定着の途上にあるものと推察される。最後に、大府市外からの訪問者の回答で興味深いのは、大府市が「ベッドタウン」であること、また、「子育てのまち」であることが相対的にお

おい点である。大府市が市外からは「住みやすさ」の方に関心が向いていることがわかる。

問 10 の観光スポットに関する回答としては、大府市民、大府市外からの訪問者の多くが「JA あぐりタウンげんきの郷」と「あいち健康の森公園」をあげている。これはアンケートを行ったところがあいち健康の森公園と JA あぐりタウンげんきの郷であったことによる。また、そもそもこれらの2つの施設がともに知名度があることにも起因している。ただし、大府市民の回答からは、やはり市の中にある施設等に対する愛着が感じられるところがある。「大倉公園」や「大府みどり公園」は、市民の憩いの場所として市民には浸透をしており、また、「大府市民俗資料館」も、大府市の歴史を知る施設として認識されている。それに加えて、若干ではあるものの、「鈴木バイオリン」を観光地として約7%の回答が見られる。この回答からは、鈴木バイオリン製造株式会社が市民の中にも認知されていることがうかがえる⁶。

問 11 は、大府市の「バイオリンの里」づくりの取り組みを知っているかを聞いたものである。大府市民の約75%がそれを知っていると回答し、一方、大府市外からの訪問者の回答では知っていると回答したものは3割にも満たない。市外ではまだ十分な認知がされていないとはいえ、市民の中でかなりの多くの割合で認知されていることは、大府市がさまざまな形で市民に情報

を発信していることによるものであろう。

問 12 では、大府市による「バイオリンの里」づくりについての市民あるいは大府市外からの訪問者の感想を問うている。ここからは、大府市民、大府市外からの訪問者いずれも施策を「望ましい」と回答するものが多く、約8割に迫っている。しかし、大府市民の中には「どちらとも言えない」と「どちらかと言えば望ましくない」との回答が10%程度ある。これは大府市外からの訪問者の回答では5%程度であるのとは対照的である。これは市民の中で、「バイオリンの里」づくりに対して十分な理解が得られていないことを示している。

最後に、問 13 では、「バイオリンの里」づくりの具体的な施策をどれだけ知っているかについて問うている。この問いが複数回答を許容していることを踏まえると、大府市民が「バイオリンの里」づくりの具体的な施策をかなり認知していることが見て取れる。大府市民は、「保育園でバイオリン音楽会を開催していること」を除けば、ほぼ広く知っていることがわかる。これに対して大府市外からの訪問者は、本イベント「バイオリン/フィドル音楽の休日」と鈴木バイオリン製造株式会社についての認識度が高い。大府市民と大府市外からの訪問者の回答との顕著な差は、「小学校でバイオリンの授業を行っていること」に見られる。大府市外からの訪問者の回答ではその割合が10%強であるのが、大府市民では2割を超えた回答となっている。これは市民の中でも特に子育て世代が、自分たちの子供の教育に対して関心が高いことを示している。大府市のめざす「バイオリンの里」づくりが、今後さらに新しい世代に引き継がれ、

⁶ 鈴木バイオリン製造株式会社が認知されている理由の1つとして、工場の建物が特徴的であることもしばしば指摘されている。鈴木バイオリン製造株式会社ウェブサイトを参照。

市民の中に溶け込んでいく可能性が大いにあることが見て取れる。

以上を総括すると、本イベントも含め、さまざまな大府市の「バイオリンの里」づくりに関する取り組みが、市民生活の中に溶け込んでいっていることが、アンケート結果から読み取ることができた。大府市でのこのような一連の取り組みが本格化したのが近年であることを鑑みれば、このような結果は大府市という公主導のまちづくりとしては十分なものといえよう。その一方、市民の中には十分に浸透していない、また理解されていないと考えられる回答も少なからず認められている。今後、大府市に求められるのは、さまざまなターゲットに適した形で情報発信を行うとともに、施策を実施していくことであると考えられる。それにより、現在の公主導のまちづくりが、市民への浸透を通じて、市民主導のまちづくりへと発展、定着するようになると思われる。

5. 結論

以上のように、本研究は、「バイオリンの里」づくりに取り組むことで市民の生活の豊かさの向上をめざす愛知県大府市の試みを、どのような形で世界に広く発信すれば、大府市、ひいては愛知県へと観光客を呼び込めるか、その具体的な方策を経済理論に立脚しつつ考察を行ってきた。2節では複占モデルによる分析を、3節では産業連関分析による分析を、そして4節ではアンケート調査による分析をおこなってきた。最後残された本研究の課題としては、これらのような大府市の試みをいかにして世界に

発信すべきかについて考えることである。そのために、これまで大府市の「バイオリンの里」づくりに関わる方々へのインタビューを実施したことで、大府市が歴史的必然性の下でこのような取り組みがなされるに至ったことが明らかになってきている。その研究については別項に譲りたい。

参考文献

愛知県, 2022, 「観光用経済波及効果分析ツール (109 部門)」,

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/toukei/i-o2015.html> (参照 2024-06-02)

愛知県, 2022, 「令和 2 年国勢調査 -就業状態等基本集計結果 (統計表) -」,

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/toukei/okuchoutoukeihyo2020-2.html> (参照 2024-05-22)

愛知県, 2023, 「『2022 年愛知県観光レクリエーション利用者統計』の調査結果について」,

<https://www.pref.aichi.jp/press-release/2022rekutouke.html> (参照 2024-05-22)

愛知県, 2024, 「第 1 章 郷土・気象 (令和 5 (2023) 年度刊愛知県統計年鑑)」,

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/toukei/000079645.html> (参照 2024-05-22)

愛知県, 2024, 「訪日外客動向調査 調査結果報告書」,

<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/513579.pdf>, (参照 2024-06-09)。

恵那市, 中野方小学校ウェブサイト,
<http://www.ena-gif.ed.jp/nakanohou-e/news/040407/040520/>, (参照 2024-06-06)。

大府市, 2023, 「大府バイオリン縁起 - Obu, die Stadt der Geigen - 子ども向け解説」,
https://www.city.obu.aichi.jp/shisetsu/bunka_sports/bunka/1005179/1028151.html
1 (参照 2024-05-22)

大府市, 2024, 「大府市の人口」,
<https://www.city.obu.aichi.jp/shisei/information/1010326/1010430.html> (参照 2024-05-22)

大府市, バイオリンの里ウェブサイト,
https://www.city.obu.aichi.jp/bunka/bunka_art/1028795/index.html, (参照 2024-06-06)。

熊本県, 「熊本県野外劇場 指定管理者 令和3年度(2021年度)管理運営評価票」
<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/207196.pdf>, (参照 2024-04-22)。

駿台甲府小学校, ウェブサイト
<https://www.sundai-kofu.ed.jp/elementary/89418/>, (参照 2024-06-06)。

常葉大学教育学部附属橘小学校, ウェブサイト
<https://www.tokoha.ac.jp/fuzoku/attribute/teaching>, (参照 2024-06-06)。

日進市, 2015, 「イベントひろば概略設計」,
https://www.city.nisshin.lg.jp/material/files/group/104/hiroba_gaiyou.pdf, (参照 2024-04-22)。

日本政府観光局, 2023, 「日本の観光統計データ」
<https://statistics.into.go.jp/graph/#graph-inbound--prefecture--ranking>, (参照 2024-06-09)。

花巻市, 2019, まち・ひと・しごと創生推進本部ウェブサイト,
<https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/shisei/shisaku/1002860/1002862.html>,
(参照 2024-04-22)。

広島市, 2015, 「旧市民球場跡地の空間づくりのイメージ」,
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/32894.pdf>,
(参照 2024-04-22)。

Yanagihara, M., 2024, “Duopoly Competition in a Scale-Limited Market,” mimeo.